

安溪遊地

安溪 さっき S さんが紹介された「公共民俗学とは」という、とても覚えきれないような難しい定義がありましたが、あれがこの会のご案内のトップにきていたら、私お断りしていたと思うんです。でも、案内メールに添付されていた「公共民俗学の創造へ向けて」という、報告の最後に、このレジュメに引用した言葉がありました。それが、私にはとても分かりやすかったです。読んでみます。「研究者という自己が、向き合う人々と一緒に共感、共有、共苦し、自己の行為を見つめ直しながら、ともに文化を継承し、創造する再帰的な」この再帰的っていうのは、S さん、自分に返ってくるっていうことでいいんですか？

S そうです。

安溪 そうしたら、ますます、私としては分かりやすいです。「それが一生をかけたかかわりの下、定型化せず、規範化せず、マニュアル化せず、汎用化せず、手段化せず、さらにその実践自体をア priori に目的化しない実践の民俗学なのである」。これなら、私もこの学問にぜひ入ろうかなというふうに思わせてくれた、分かりやすい文章だと思いました。

さて、今日の私のレジュメの「他人ごとから自分ごとへ」という副題は今朝付けたので、予告には入っていませんでしたが、まずは公的と私的ということを考えてみたいです。例えばフランスとかに住んでいると、扉に「プリベ（英語ならプライベート）」って書いてあることがよくあります。プライベートって書いてあるっていうことは、そこに入ったら大変なことになる、許可なく入ったら、もう大変な目に遭うぞ、ここは絶対に入るなという意味、よそ者は入るなという場所なんであって、その意味では、最も強い禁止の言葉がプライベートなんですよ。

日本に来ると、公共というと、「これは公共事業だから教えられません」とか、さまざまなバリアーが施されているのを痛感します。公共という言葉が、どちらかというと強い権力、権利を主張するようなものに使われる。なんですけど、それは私はちょっと待ってねといいたい。「パブリック」というその言葉を、「公共」と翻訳したとたんに、オオヤケが高くワタクシは低い、という日本の現実のなかで、なんか字面だけから強そうにひびかないかという、心配があるのではないか。だから S さんのこの説明は、一見弱々しく見えるけど、実はちからづよい脱民俗学宣言として、私にはしっくりくるなと思ったということです。

地域研究、実は私もしていました。というか、今も研究をしているつもりですが、よく悩むのは、この心と脳の行き違い、ハートとマインドと英語で言ってもいいですけど、要するに、知ることと愛することのバランスがなかなか取れなくて、上皿てんびんごとガラガラと

転がり落ちそうになるという、そういう場面に、なぜかよく出くわすんですね。毎日ではないですけども。

なんでハートの方に傾いて地域に深入りしちゃうんだろうって、ちょっと自分でも反省しながら考えてみました。そこで、「調査地被害」ということが出発にあるな、と気がきました。フィールドに行って「調査に来ました」って、若いころは言ったもんです。私の場合は、23歳のとき、西表島に行ってそういいました。そうしたら、すごく叱られました。「バカセなら毎年何十人も来るぞ、帰れ、帰れ」って言われました。それで、これじゃいかんのだな、と気付いて、最近は「勉強させてもらいに来ました」と言うように学生には教えています。

問いかけの1番目です。地域のために良かれと思って、やったことが失敗したらどうなるの。これは日本民族学会（今の日本文化人類学会）で、研究倫理のシンポジウムに私が呼ばれて、西表島の無農薬米の宣伝をしたんです。「いいお米があるから買って、島を応援してください」って。そしたら、「はい」と手を挙げて、質問した人がいました。僕の本ではSさんって書いていますが、「良かれと思って一生懸命地域のためにやって、それが失敗したとき、研究者の責任はどういうことになりますか」という、先輩からの厳しい質問でしたが、私は「去年は本当に大変で、もうちょっとで首をくくろうかとも思ったんですけども、今年はどうして皆さまにご宣伝できるまで来ましたので、S先生も5キロでも10キロでも、どうぞお買い上げください」と言いました。けれども、1キロも買ってくれなかった。

次、2番目。自分の専門は何かという問いかけです。専門も、いろいろあるはずですが、私は自然人類学を京都大学で学んで、あまり熱心でもありませんでしたが、いちおう動物学ですから理科系の学生であり大学院生でした。ところが、一番最初に雇われた大学では日本民俗学と文化人類学を担当する教員でした。それでこんどは、文科系のふりをしながら過ごしているうちに、いろいろな地域で、いろんな出来事が起こってくる。

出来事というのは、何か事件が起こったから行ってみようかなではなくて、事件@（アット）ホーム。例えば、自分が住んでいる県で原発新設をめぐる意見の衝突といった問題が起こってくる。そのときに、「いや、それは専門外ですから」って、大学教員のみんなが黙っている。それなら誰一人、それに対して物言わないのかい？ っていうところで、「ちょっと待て！ 上関原発計画についても、その人権侵害についても、さらにその予定地の自然の大切さについても、発言するぞ。今は文科系のふりをしているけれど、おれは元理科系なんだ」というわけです。

こんなわけで、地域やそこで起こる問題が優先であるという立場に立てば、自分の専門にあまりこだわってられない。そんなものは、いつでも捨てる気分なので、最近、僕の研究室の看板が、文化人類研究室だったのに、「地域学でいいよね？」と言われて、「はい、何でもいいです」と言っているうちに、地域学研究室になっております。それで、最近は名刺に地域学と刷っています。

研究者の多くは、黙っていたほうが賢いという判断で黙っている人たちが、たぶん多いん

じゃないかなというふうに、特に原子力関係のことについては、強く思うことがあります。いろんなところで、さまざまな問題に背中を押されて、ドンって飛んでしまって、泥沼に落ちたりするわけですけど、そのとき、「ちょっと待って、スピード超過よ」とか言って、ブレーキを踏んでくれる妻がそばにいてくれるおかげで、そのまま地域の泥沼に沈んだり、あやしい宗教団体に行っちゃったりしないで、時々冷静な学問の側に戻ってきているという現状です。

ここで、きょうのお話の結論を、申し上げておきたいと思います。地域と学問の間には、越えられない壁というのはある。それはあるけど、やってみる価値はある。「参与観察っていうのよ」って1年生で教えたりしますが、その参与している自分を観察している自分がいるし、「参与の観察」も大事だなというようにも思ったりしています。参与観察なんていうより、「やってみる」というのは、いい言葉です。

最近、フェイスブックの「笑ったらシェア」というサイトで見つけた写真に、窓から、たぶん1歳ぐらいの子どもが外を見ているんですけど、横で同じくらいの背丈の犬がやっぱり立って外を見ている。犬が人のまねをしているのか、人が犬のまねをしているのか、よく分かりませんが、そのようすがそっくりで、笑える。この2個体の間にはイヌとヒトという越えがたい種（しゅ）の壁があり、イヌはヒトになれず、ヒトはイヌにはなれない。それは科学的事実なんですけれど、そんなことにかかわりなく、ともに暮らす仲間として同じ時と場を分け隔てなく共有しているという仕合わせが伝わってきますね。これって、「やってみるフィールドワーク」の雰囲気の説明として、特定の事例に初心者を縛り付けるということがない例示として、わりといいなと思っています。

研究者と地域住民が出会うとき、「調査される側のさまざまな迷惑」をひきおこさずに、同じ時と場を生きるいい仲間になれないものか。これが、1972年に「調査地被害」を書いた宮本常一先生の願いだったと思います。彼が、恩師でありパトロンであり、家族として30年居候した渋沢敬三さんから教えられた三つの教えを書いています。1番、他人に迷惑をかけないこと。2番、出しゃばらないこと。3番、他人の喜びを心から喜び合えること。「なんでこんな簡単なこと？」って思うようなことばかりです。でも「なんでもないことのようにであるが、これを実行することは、実に難しい」と宮本先生は続けて書き、それが実行できていないさまざまな例を挙げておられます。

彼は「調査地被害」にこう書いています。「調査というものは、地元の人のためにはならないで、かえって中央の力を少しずつ強めていく作用をしている場合が多く、しかも地元の人々の良さを利用して、略奪するものが意外なほどに多い」。これが、この辛口のエッセーの結びの言葉でした。私は大学院生になる前の年の1973年に、川喜田二郎先生の移動大学運動にかかわる中でこれを読んでいたのは、自分にとって大変幸運だったなと思って感謝しています。

なんのための研究なのか、誰のための研究なのか、ここまで来るだけのお金は一体どこから出たのかということ、西表島の人には厳しく問われ続けてきました。考えてみると、文

化人類学は、もともとは植民地支配のために生まれた学問だったし、自然人類学も、ナチスのユダヤ人識別に協力して活躍した歴史があった（『人類学者と少女』岩波現代選書）。そういう歴史を忘れた研究者として過ごすというわけには、少なくとも私はいかない。

1962年、渋沢敬三さんが「わが食客は日本一」という宮本先生の推薦文を『文藝春秋』に載せます。食客（しょっかく）は居候です。そこに、こうあります。宮本君は単なる学徒ではない。彼はみかんをパクッと一口食べると、「ん？ この畑の土はなんちゃらとなんちゃらが足らん」と、そういうことが言える実践的農家でもある、というふうにして推薦文を書いてくださってわけです。渋沢さんが亡くなる2年前ですね。

さて、私がこのフィールドワークということ志したのは、先ほどもうしました移動大学というものに触れたときです。この写真は、生徒たちと2人のインストラクターなんですが、先生役の2人はのちに結婚して、今日はいっしょにここに来ております。この人たちとも時々出会います。川喜田先生は、東京工業大学で経験した学園紛争へのひとつの答えとして新しい移動大学運動を始めました。2週間、自然の中でキャンプして学び、そしてフィールドワークというものにも触れるという、プログラムです。108人のメンバーを集めてやるっていうのを、大学3年のときに経験して、ボランティアスタッフになり、4年生のときは行ったきりになって、ほとんど大学にいませんでした。1973年のことです。

移動大学で植え付けられたものは、フィールドワークって、なんかよく分からないけど、いいなあというあこがれ。KJ法っていうものが、あるらしい。写真を撮ったことがなかったんですけど、「カメラマンやります！」って言ったら、「はいどうぞ」と言ってやらせてくれる。そういうやわらかい組織ではありました。

そのあと、「そうだ！ アフリカでフィールドワークしたい」と思いついて、京大の大学院を受けました。理学研究科です。指導をあおいだのは伊谷純一郎先生で、この方はちょうど、チンパンジーの研究から人間の研究へ、視野を広げようとしておられるところでした。私はアフリカに行きたくて、先生のところに行ったのに、「君の行くところは1ヵ所しかない。西表島や」。「それ香港の近くですか？」って言ったら、「何を言うてるんや。地図をよく見なさい。そこに廃村がある」。「ないじゃないですか」。「いや、あるねん。地図にはないがあるんだ」。「廃村なら京都の北山にもいっぱいあるでしょ？」と聞いたら、「あんな、人類学のフィールドは、遠けりゃ遠いほどええのや。いま金がないんで、安上がりの熱帯もどきで我慢してもらわないかんが、そのうちアフリカに行ける。僕が初めてアフリカに行ったのは37歳の時やった」と言われました。それで仕方なく西表島に行くことになったんです。

伊谷先生のユニークな教育については、この『島からのことづて』（葦書房）という本の中に、章ごとの座談会式に、私と貴子が語っているのがあります。

さて、西表島の廃村の無人のフィールドです。「バカセなら毎年何十人も来るぞ。西表の人間はな、口は悪いが心はもっと汚いぞ」（笑）。そういう非常にハードなというか、ブラックな、そういうつきあいに耐えて、それが、駆け出しのフィールドワーカーを優しく育ててく

れている愛情だというのが分かるのに、しばらくかかりました。でもね、廃村研究って、考古学でもなければ、人類学でもなく、何学でもなかったのだから、発表しても、論文を書いても、誰も「面白いね」と、お世辞にも言ってくれない、そういう時代でした。

これが西表島での私の道です。道じゃなくて、マングローブの生えた海岸を腰まで水につかってじゃぶじゃぶ歩いているんですが、ここしか通れない。村に戻れば、三線(さんしん)もやったり。これが初めての田植え。下手でもいいから、やってみる。下手で遅いから、みんなに置いていかれて、最後に取り残されてしまうんですが。それから、これが家主になってくれた石垣金星さんです。これはそのお姉さん。僕は彼女と2人で踊るんですが、ぼくはかわいい娘のメーキャップ。このとき、息子は「知らない怖いお姉さんが来た」と言って泣き出して逃げました。

では、フィールドでの接近遭遇の練習問題をしましょう。これは、学生にやっている練習問題です。久しぶりにフィールドから戻ってくると、人里恋しい。そうしたら、家主の金星さんが「きょうはちょっと飲みに行こうか」というので喜んで近所の家について行きました。そして飲んでしていると、そこに酔っ払ったおじさんが入ってきて、こんなことを言います。「おまえは廃村調査とか、偉そうに言うてるが、本当は墓泥棒だろう？ あの石垣港の土産店につぼが売ってるのは、おまえが手引きしとるんだらう。1個1万円もしてから。わしの目はごまかせんぞ」と来たんですよね。で、あなたならどうしますか？ これは授業でやるときは、ドラマチックに30分くらいかかるパフォーマンスなんですけど、今日は短く。あなたならなんと答えますか。いかが。どなたかやってみませんか？

S 私、安溪さんがやったのを、『調査されるという迷惑』の本で読んで知っていますから(笑)。

安溪 実は、この間、その本に書いてあるのを持って、石垣島に行きました。そのとき一緒に隣で飲んでいた石垣島在住の民俗学者で画家でもある、石垣博孝さんという方にお会いして、僕はビデオを回しながら、「あのとき、僕はなんと仰いましたかね。『謝れー！』と言って、怒鳴ったのを覚えてるんですけど」と尋ねました。そうしたら、「いや、きみ、そのあと、『学問をなんだと思ってるんだー!?!』って言ってたぞ」というんです。

S それは本に書いてなかった。

安溪 すっかり忘れてたんです。「学問をなんだと思ってるんだ」なんて、ほー、そんな偉そうなこと言ってますか。どうも失礼しました。さて、それに対して、そのおじさん、ビール瓶を振り上げて、「何、おれに謝れだどー！」と、こう来たんで。でもこれはまだ優しいんですって。別の島だと、ビール瓶を持ったら、バンと底を割ってそのまま水平に突いて来るんで、頭上に振り上げているうちはまだ優しい、と言われました。

それでそのあと、怖いから、なるべくその人の家に近づかないようにしていましたところ、ふと一本道で出会ってしまいました。そしたら、その人がすーっと寄ってきて、「今晚、酒飲みに来い。おれ、おまえ好きだからよ」って言うんです。迷ったけれど行きました。持って行った30度の泡盛を1升はたちまち飲んでしまって、近所のおうちをはしごです。はしごって、スナックなんてなかったから、民家に上がり込んで、お酒が出てくるまで座っているだけのはしごなんですよ。1杯飲んだら、「次行こう」と言って、灯りを付けている家は大変なご迷惑。気が付いたら、見知らぬ家の縁側で、彼と絡まり合って寝ていました。たぶん5時ごろでしょう。け飛ばされて、「おい、アンケイ、夜が明けたら恥ずかしいから帰ろう」と言うように戻りました。

それからは、例えば台風が来ると、「おい、することもないから飲もう」という裸のつきあいになりました。地名研究でもいろいろ応援していただきました。これは、いっしょに深酒したから良かったという話ではなくて、いろんな対応によって、思いもよらない出来事があるということです。

ある島で、成果の正しい還元がないということについて、すごく叱られてからは、出来る限り地元の人にチェックしてもらっています。それからできるだけ、家族でつきあいます。これは息子が小さいころの写真です。たまたまお祭りで着物着せてもらって、太鼓を叩いているところです。「仲間になりなさい」と言ってくださって、「下手でもいいから叩いてみて。やっぱり下手だな」という、そういうところです。

29歳の時に、大学教員として就職できました。それは良かったんですが、給料が2ヵ月遅れていました。ボーナスとベースアップは5年前に廃止されていました。研究室は13人で1部屋でした。研究費はゼロだったのが、年度途中で「喜べ！ 補助金で1万円もらえることになった」と言われました。1年で国立に移って退職金を6万円もらいました。ですから、今、大学の冬の時代って言われていますけど、常勤教員の、給料が出て、ボーナスがあって、研究費もあるような状態が冬だなんて、まったく思っていません。

さて、こんなかたちで、私はその次にやったのが、廃村のことを聞くうちに、面白そうだなということで、八重山の在来稲作のことを聞きました。稲作のことを書いたら、これはけっこう需要があった分野らしくて、民俗学の谷川健一さんに「こんどの本には、あなたのよな農学者に入ってもらわないと」といわれたりしました。

農学者といわれても、違うんだけどなと思いつつも、入って行って、いろいろ書かせてもらったりするうちに、私は古代的稲作研究家であるふりをするようになりました。そきに、西表島の田んぼで農薬散布というものが始まるんです。そのことを島の人は何も考えずに、Tシャツに素手でまいて中毒して倒れてみたり、撒いた農薬や除草剤が田んぼから川を流れて、サンゴ礁の海に行く。それらの全部が自分たちの食べるものの取れる場所であるし、また実は田んぼの周りに、一番イリオモテヤマネコが多い。

このままでは、イリオモテヤマネコもやばいし、サンゴもやばい。何より人間の健康がや

ばいということになっちゃっているのに、人々は何も考えずに、ただ言われるままに農薬を撒いているということを、さっきの写真で女装していた石垣金星さんが心配しました。私の一家は、このとき1年半ほどフランスに勉強に行っていたので、パリに金星さんを招いたんですよ。飛行機の切符を送って「広い世界もたまに見ておけば」と言って。

そうしたらわずか数日で、「選挙がある」といって帰ってしまったんです。僕は腹が立ったんですが、今、山口で知事選挙にかかわってみると、それももっともかなとは思ったりもします。その時、彼が言ったのは、「島は農薬で大変なことになっている」ということでした。

フランスから日本に戻ったときに、しばらく西表行きをお休みしているから、行くための研究費がないわけですよ。それで日本生命財団というところから、研究費をもらったことがあるのを思い出して、「成果発表シンポジウムをやりましょう」と申請したら、「それは大変けっこうです」と言って、研究費より多い150万円のシンポジウム代をくれました。

それで帰国して2ヵ月後の1988年11月に西表島でシンポジウムをして、そこで私は、「15世紀からの西表島の稲作の歴史を振り返ってみると、ずーっと無農薬でやってきたんだよ。今、農薬をまき始めなくても、それに付加価値を見いだす人たちに、上手に売っていけば、新しく始まる特別栽培米の制度に乗せて有利に売れば、ちゃんと生活が成り立つようになるし、農薬もまかないで済む、そういう道があるはずだ」と語りかけました。『農業六法』も買い込んでにわか勉強もしました。

でも、そんな言葉で動くほど島の人はやわじゃない。「なるほど。そんなこともあるか、ふーん」、という程度です。次の年の7月、西表島に行ってみたら、なんと「ヤマネコ印西表安心米」というブランドができていて。そして、農協に対抗して、独自の倉庫や精米所を作る、そういう動きがおっぱじまっていました。

僕は大変驚いて、「この倉庫いくらかった」と聞いたら、「材料費だけで600万」という返事でした。人々の労働は全部ボランティアですから。「でも米代から分割で払えば大丈夫って言った」って言うから、「誰が言ったの?」と言ったら、とっってもビジネスの上手そうな安心感のあるおじさんが来ていて、「あなたがたのお米は、みんな私が買いましょう。倉庫の費用なんかは、そのうちの一部を、10年月賦ぐらいな感じで返してもらえば、すぐ返せますよ。ハハハハハ」みたいな。その人の言うことは、みなさんころっと信じたんですよね。大船だと思って乗ったんですが、実は、その人が泥船だったんです。お米を売る力がなかった。

その後の経緯をふくめて、このスライドにはとても美しく書いてあります。これは地球研というプロジェクトで、「西表安心米物語を1枚紙にして」と湯本貴和さんに言われたので、1枚のスライドにしました。安心米がスタートして、合鴨を導入することで、除草剤のない栽培が順調にいくようになり、1998年には10年かかって借金も返し終わり、2006年には後継者も帰ってきました。めでたし、めでたしというふうに書いてありますが、これは表の話です。

裏は、例えばスタートするまでが大変です。どのくらい大変かっていうと、お米が売れな

い。しかしそれはもう、沖縄島的那覇に送ってしまったんです。台風が来て、にわかにつぶれた倉庫がつぶれたら、もう大変なことになるんで、特別栽培米の許可がもらえないまま送ってしまったんです。そうすると、隠れもない「ヤミ米」という扱いになっているんですけど、それでは役場の手落ちになりますから、役場としてもなんとか丸く収めたい。

しかしこちらはお金がないんです。農民に約束して買った、この値段で買うって言ったものが、そもそも1銭もないわけです。資材、トタン、材木、それから、バックホーという機械、それを貸した人たちや、売り掛けになっている人たちから、矢の催促です。「金を払ってくれんと、うちの会社はつぶれる」と言ってくるわけです。僕も、居候ですから、時々その電話を受けるはめになります。そして毎朝、農家の人が「おはよう。あの一、あれどうなってるかな」と聞きにきます。金はいつ来るかっていうことです。そしてほとんど詐欺師になってしまっている那覇の泥船おじさんに電話すると、「今、一所懸命金策をしていますが、あさってぐらいには振り込めると思います」と言うから、こちらも農家の方に「大丈夫です。順調に行っています。あさってぐらいには、お払いできると思います」と繰り返すんですけど、だんだん農民も青ざめてくるし、詐欺師の片棒かつぐみたいになってしまったこっちも胃が痛くなってきます。

そういう中で、とってもいい話がきました。「全国組織の自然王国の一部である琉球自然王国の国王」という人からでした。自然王国は、藤本敏夫さんがやっていたものです。琉球自然王国なんてきいたこともありませんでしたが、「この袋を使って、全国組織に流せば、わずか60トンぐらいのお米は、もう1ヵ月もたたずに全部はけてしまいます。この袋で、この高い値段で売れるから、大丈夫ですよ」。と言って、買いにきました。「『那覇の倉庫の扉を開けてください』という電話1本をしてくださるだけで、けっこうです」と言うんです。

僕はその人をバス停までバイクで迎えにいき、後ろにのせて連れてきました。横にいたから見えなかったんですが、金星さんの奥さんが、「アンケイ、見た？ もってきたアタッシェケースに札束がぎっしりだったよ。パッと開けたら、札束がずらーって入ってた」。でも、なかなかやばい船かもしれないので、うかつに乗ったら大変。お金がちゃんともらえればいいんですよ。でも「翌月末払いの手形でくれる」って言うんですよ。やばそうでしょ？ 那覇の応援団に聞いたら、彼は持ち逃げの名人だっていう悪いうわさまで聞こえてきて。それで大変困りました。

そのとき、霞が関に勤務する知り合いに助言を求めました。電話で率直に聞きました。そうしたら、自分の職分をはるかに超えて、ふつうの役人には絶対に言えない助言をくれました。いまでも感謝しています。「アンケイさん、気をつけなさい。ヤミ米の鉄則は即金ですよ。即金というのは、トラックからお米を降ろしたらその場で現金をもらって、はい、さようなら。どこの誰かは知らないけれど、お金だけはちゃんと全額もらった、米もわたした。それが鉄則で、そうじゃなくて翌月末の手形で払うなどというのは間違いなく詐欺師です。そんな詐欺師にひっかからないように、『正しい自由米道』を歩んでください！」と助言を受け



ました。それで私は、首をくくらずに生き延びられたんです。あれが一番やばい橋でした。その詐欺に乗りかけた。困り果てていたところにつけ込まれるところだったんですね。

というので、自分ごとになる方法は、この場合は結果的には極めて単純でした。農民へのお金を少しでも払うために、なけなしの貯金を全部下ろして、これでとにかく、少しでもいいから農家の人に払ってちょうだいというふうにしたわけです。だから人ごとじゃないんです。もちろん、自分が全額払えるわけではないし、農協に卸すとしても1,000万円を超える額ですから。借金を合わせれば、2000万円を超えていました。それをだんだん借金を返して。そして、「おまえのは親戚も全部返し終わって、そのあとで返す」っていうことにされて、少しずつ返してもらったのが、とうとう最後に、全額、もちろん利息はないですよ。元金が全部返ってきたのが10年目の1998年のことでありました。

ですから、そういう出来事があったわけですけど、その間、論文を書けない。学会発表もできない。研究者として失業状態のときに、祖父江孝男先生から電話がかかってきました。「こんど、研究倫理というシンポジウムを日本民族学会でやるんだけど、出てくれない？」って言われたから、「いや、いま私は西表島のお米の宣伝しかできません」って言ったら、「いや、それでけっこうです」って言われたんで、よし、お米の宣伝しようと思って、参加しました。

「こんな素晴らしいお米があるのに、食べなきゃ学者の恥」みたいな感じで言いましたら、祖父江先生が、「私もこれまでは新潟県魚沼郡のお米をいただいてきましたが、このたび、西表のお米をいただいて食べてみたら、大変けっこうで、それよりもおいしいかと思うようなお米でございました」と言ってくださいました。営業部長の私としては、祖父江先生はハナマル。で、そのあと、先ほど紹介したように、フロアのS先生とのちょっとしたジャブの応酬がありましたが、私はそのとき、ひそかに心の中でつぶやいていました。「白い猫でも黒い猫でも、西表安心米を食べる猫は良い猫である」。

そうそう。ここで私、環境関係の賞をもらうんですけど、この賞は、お金がない西表安心米の宣伝の費用を稼ごうと思って、島の方のふりをして、自分で自分を推薦する文章を代筆したら当たってしまって。それを、もらってきたお金50万円を、もちろん自由に使っていいんだけど、安心米の活動費として寄付しました。そして糸島から宇根豊さんをお招きして、虫見板の使い方をなったり、イリオモテヤマネコも水田の随伴生物であるという話をしたりもしました。彼は「百姓」と自称する変わった農業改良普及員でしたが、やめて農と自然の研究所を10年やられました。それに13万円使ったかな。あと37万あるぞと思っていたら、金星さんがペロッと使ってしまっていました。

それもあって、僕は彼とは絶交したりもしています。経営上のことで意見があわない。例えば、「そんななんとか菌なんか信じて、それに大金つぎ込んで、こんなに草まみれなっちゃったじゃないか。どうするんだい」と言ったことです。独自にアイガモ農法を根付かせるまでの2年間、僕は彼とは絶縁状態。消費者の世話人だった真喜志好一さんから「営業担当の

2人がけんかしてたらやりにくくて仕方がない」と言われて、こちらからわびをいれて仲直りしました。

これが西表島でのアドベンチャーのあらましで、その結果、私と妻は、商売は学問より厳しいと当たり前のことが、しみじみ分かりました。期限までに論文を書けなくても、「あっ、ごめんなさい」でたいていは済むけれど、青ざめたお百姓さんや、殺気立った借金取り、なんとかだましてやろうという詐欺師に、この際ヤミ米で検挙してやろうという役人たち、そしてたまにいるクレマーの消費者。電話で、鼻をつまんだりして、いろんな声を使い分けながら、1人何役もやりながら、それぞれの対応をやらなくちゃいけなかったんで、それはそれは大変でした。

僕は、夏場、かっけで足がひどくなるっていう症状がありました。ところが、西表島の無農薬玄米を食べると体調が良くなったんですよ。薬なんかにたよらなくても、ビタミンB不足が解消されるみたい。自分が食べて、元気になりたいという気持ちもあって、一所懸命に宣伝していました。すると、宣伝が行き届くこともあるし。タイ米輸入で日本中パニックになったようなとき、注文が殺到するんですよ。なんでもいい。日本米ならというバブルな消費者たち。その値段なら安いというんですよ。玄米10キロで6050円プラス送料（新米は7月始め。ご注文は、電話ファックス09808-5-6303西表安心米生産組合）。値段をずっと据え置いています。

それでそのときに、バーッと全国に送っちゃった。すると年間契約の人の米もなくなる。私の米が真っ先にないんです。「あんたの米はない」。「それひどいだろう」と言ったら、それは、あんたは親戚だろうというのを沖縄では「ウトウザ」と言うんですけど、ウトウザ扱いということばがありあす。くどくどした説明がいらぬから、真っ先に切ることができる。貸したお金も一番あとまで返さない。親戚扱いされるといふのは、そういう「素晴らしいこと」なんですよ。

ふと、私は、これは援助に伴う構造的矛盾じゃないかと気付いたんです。懸命にボランティア営業部長をして、その営業の成果があがったら「おまえの米はない」って言うんですよ。安心安全な、ヤマネコも人も元気になるお米をたべて、自分も元気になりたいからやっているのに……。それじゃ仕方がないか、って始めたのが、山口安心米です（笑）。自分で田んぼを作る。とにかく西表がどうなろうと、自分の納得のできる稲を自分で育てて食べる分だけは確保する。それには、西表島で学んだノウハウが役にたつ。土地を借りて、自給的稲作を1993年からつづけています。

そしたら「田んぼ返せ」って言われました。大変困っていたら、2010年3月11日を機に、「田んぼ買わんか？」という話があつて、いいなと。福島第一原発の事故によって、僕らは背中を押されて、田んぼを買うことにしました。田んぼについて家も買いました。自宅から45キロも離れているので、田んぼの家とこれまでの山の家を、通うのが大変です。昨日も田んぼの家で、大きな乾燥機設置の準備のために、倉庫の床にコンクリートを張る、その準備、

生コン手配などをしておりまして、頭の中は農作業のことでいっぱいなんです。そういうふうになりました。なぜ3.11を機に決心がついたかは、またディスカッションがあったら、したいと思います。

ここまでで何か、それはおかしいだろうというのがあったら、言ってください。話を飛ばしすぎているかもしれません。よろしければ、次にいきます。

瀬戸内海に上関原子力発電所計画というものが、1982年ごろに起こりましたから、もう30年たっています。そして、このことについて、かかわるようになったきっかけは安溪貴子が、山口県の環境なんとかになるんです。

安溪貴子 山口県環境影響評価技術審査会。アセスメントの審議会です。

安溪 アセスメントの御用学者、もとい、失礼しました(笑)、県の委員をしていましたところ、そこに原子力発電所のアセスが、日本で初めてかかってきたわけです。そして、いろいろ私もない知恵絞りました。ああも言うてみたら、こうも言うてみたらなんですけど、すごい圧力で、物を言わさないように進めていく。

貴子 違いますよ。知事意見をまとめるまでは、委員の言うことがどんどん通りました。

安溪 知事の意見として、アセスメントの委員会で出たものを、一言半句も変えないで、そのまま出すというふうに頑張ってくれた職員の人がおられました。アセス室長が頑張ってくれて、そこまではいったんですけど、そのあとはもう何を言っても駄目、権限がありませんというような木で鼻をくくったような回答になりました。それで、ちょっと日本生態学会に持ち込んでみないかというふうになりました。

それでは上関原子力発電所関連のスライドをみていただきます。国際会議で見せたものなので、英語になっていますけど、文化のルネッサンスと、それからバイオリージョナリズムという話題です。バイオリージョナリズムというのは、例えば瀬戸内海全体は1つの海であって、その中で、山口県原発がボーンと爆発したら、広島との県境で放射能が止まる。まさかそういうものじゃないですよ。私が川の上流に住んでいて、何か悪いものを川に流せば、それはそのままワッと海までいくっていう。そういうふうにして、自然のまとまりにそって人々は生きてきたし、生き物も生きてるし、そこには龍神もやどる。文化だって、それを無視して考えてはいけないだろうという、そういう考え方ですね。こういう流域の思想と、文化の再生ということを予定地の目の前の祝島に即して考えてみました。

素晴らしい、美しい海があります。また豊かな海でもあります。漁師がここで暮らしてい

ます。水の中に入ると、もう竜宮城のようなところであるだけでなく、生物学者が目を輝かせて、2回目からは「自分のお金で来ます」と言うほど、さまざまな希少生物のいるところです。そして4年に1度、このお祭り、神舞(かんまい)というお祭りを、大分県と結んでやっています。

江戸時代、「なんでそんなほかの藩と結んで、そこから神主迎えてやるんか」って言ったときに、「1000年も昔からやっているものだから止められません」というので、お許しが出たという、そういういわく付きのお祭りで、原発の対立のために2回休んだ。でも3回休んだら、島はもう、もたないということで、復活したものです。ですから、自然もすごい。文化もすごい。それだけではなくて、生物多様性の面からもすごい。

ところが2011年2月21日午前2時、600人の作業員がこの予定地の浜に現れました。そこで反対していたシーカヤックによる若者たちなど、どこにいるやら見えないぐらい。船も何十艘(そう)と来ました。これを埋め立てるため来たわけです。ですから、こういう、ここにいるのは島の人。この人。これとこれが以外。なんかこれも反対してる人か。

要するに、こういうものすごい暴力とお金で襲いかかってきて、これをつぶそうという、埋め立てようという、そういうふうになっている。

貴子 まだ設置許可が下りていないんですよ、ここ。

安溪 それで、こんなことが自分の県で、自分の海で起こっているのに、何かできんかということで、生態学会、奇跡の海だったかな。生態学会にお願いして、いろいろ意見書を出してもらおうというふうをお願いしたら、出してくれました。それでうれしくなって、最近12年は、私は生態学会しか行っていません。文化人類学の学会には一度も行っていません。これ、けっこう3泊4日ぐらいあって大変で、もうすっかり理科系の気分で、理科系の学会に行つて、文科系のことを言う。コウモリと申します。

さて、こんなことが起こってしまって、地域が崩壊するときに、地域研究ってありなの？ さっきの答えは、ますますそれを利用して太ろうという、とんでもない人たちもいるっていうことでしたが。天災ではなくて、人災も起こってしまった。

そしてこれは4号機を見に来たIAEAの人たちです。このIAEA。国際原子力機関。覚えておきましょう。これはプルトニウム。飲んでも大丈夫。すぐトイレに直行するっていう、頼れる仲間プルト君というアニメで、私がユーチューブに、これを古いテープから上げたら、3週間で30万ヒットぐらい行ったんですけど。とうとう気付かれて削除されてしまいました。が、今、あちこち広まっていますので、ニコニコ動画なんか見てください。

要するに安全神話を、原発大丈夫、放射能大丈夫。それを関係する人たちを全員黙らせるっていう、そういうことがずっと行われてきたんだということを、台湾とケニアと日本から、ちょっとご紹介しましょう。

これは京都の地球研というところでやった東アジア人類学会議、主に雲南省の中国の研究者と、韓国のソウル大学の先生なども集まって、見せたものですけど。例えば台湾の台北です。この人、原住民の大臣に当たるような、原住民族の高貴の人ですが、「会いたい」って言ったら、「ご飯食べてるから、おいで」と言って、行ってみたら、すごいらんちき騒ぎのど真ん中に入ってしまって。今これは、ワインとビールを半々に割ったのを、ワーッと一気飲みするという恐ろしいのをやっている最中で。

ここに2人、白いシャツの、違う雰囲気の人がいます。名刺をもらって、あらびっくり。核廃棄物の所長と副所長でした。この島は廃棄物の処分場がある島なんで、この有力者たちに接待をして黙らせる。それって日本から学んだのかい？ っていう方法です。

ケニアです。ケニアに1998年、4カ月おまして、向こうの文部省に当たる所に行きましたら、報告書たくさん並んでいて、その半分近くが、僕の感じでは3分の2ぐらいが、IAEA っていう書いてあったんですよ。「なんでこんな言語学とか、社会科学とか、理科系は言うに及ばず、あらゆる分野にIAEA 金を出すんですか」って言ったら、「いやちょっと知りませんが、最大のドナーですよ」と言われたんです。分かるまで何年もかかりました。原発計画がケニアのインド洋岸にあって、そのために文句言いそうな知識人に、全部あめを配っておくという、そういうことだったのですね。

それから最近、環境学の百科事典が出ました。でも原発のゲの字も、チェルノブイリのチェの字も何もなくて。僕は自分も書いたので、もらって読んで、作品見てがくぜんとしたんですよ。それで、これは経産省と文科省に遠慮してるんだな、いうふうに思いました。

だから、ちょっとこの沈黙破らんとなんともならんじゃない？ っていうんで、こんな現地調査、そのまとめをした、もう一つの環境影響評価書、民間のやつなどをやりましたし、COP10 でも、美しいパンフレットを作ってもらいました。そういうことを、環境団体と手を結んでやったりしてまいりました。こういう計画、ちょっと時間がないので飛ばしますけど、本当に美しい海、素晴らしい生き物たち、絶滅危惧のものたち。これ、広島で500人集めてやった会議です。

そして生物多様性は、文化によって支えられている面が多いので、これを生物文化多様性というふうに、私は言いたいんですけど、自然、人間が助ける、自然も助けるという写真ってなかなかないんで、これはそのイメージ。ピーター・バーグさんという人が言い始めた言葉です。

祝島ではこうやって豚を飼ってる。そして祝島1000年計画ということで、自然エネルギーにも取り組んでいますし、私たちはスペインに5ヵ月行っていましたが、この自然エネルギーで暮らしている人たちに出会えました。これはうちの山口市仁保の田んぼです。こういう活動が好きな若い人が多いですね、最近。

これは祝島の人が港でウニを洗っているところ。一番汚れるはずのところ食べ物で洗って、そこに食べに来た魚を、箸で頭をポンとやる。「ちょっと遠慮しなさい」「あんたも」と

か言いながら話をしているところです。魚語ができる。そして漁師が「あそこに原発ができたら、この海がみんな死ぬるんじゃない」と言っている。これは「祝(ほうり)の島」という映画の1場面です。

高さ7メートルの石垣を、30年かかって、3段に築いた棚田です。おじいちゃんの代から築いてきたんです。そういう人もいれば、福島原発建設のときに中で働いた人が祝島にいたので、その現実を知っていたということもあります。そしてとってもすてきなレストランなんかもできていて。物々交換を基本に島では考えていて、現金にいかにか頼らないかということを行っているんだよというふうにして。

これは神舞の様子ですね。それから農業を島の若者が、外から来た若者に教えているところ。これが海の好きなカヤックに乗った人たちが、この工事船を止めているところです。今、訴訟されています。スラップ訴訟というんですけど。そしてこれは1040回目の、毎週やっているデモです。そんな中で、私たち本当に何を今考えなくちゃいけないかというふうなことを聞きたいです。今本当にこういう放射線の被害という事態が進行中ですし。

これは乳がんが30年の間に10万人あたりで5人弱から16人、17人と、3倍以上に増えているというデータです。アメリカ合州国でも同じ傾向があります。でも郡(county)ごとに調べてみると、発癌率からして危ないところと、中ぐらいのところと、むしろ減っているところがあることが分かりました。これと原発の分布を重ねてみると、実によく合う。違うところも若干あるけれども、そういうふうになっていて、原発から100マイル、160キロ以上離れたところではリスクが少なく、それより近いところではリスクが高いという、そういうふうにしにしか読めないんです。

日本で同じことをやると、すでにこうなっていて、和歌山県紀伊半島の先っぽと、北海道の東側しか100マイル以上の場所はなくて、台湾に近い西表島もやばい。これは中国大陸を書いてませんけれど、もう東アジアの現実はこうなっちゃっているわけですね。そして、もともとのバイオリージョン、流域としてはバラバラだったところが、1つに統合される。それがチェルノブイリ事故の意味でした。要するに地球全体が、1つの流域となってしまっているという現実です。

そして日本と同じサイズの地図ですけれども、チェルノブイリから北に1200キロ離れたところにフィンランドのサーミの人たちがいます。このトナカイがすべて汚染されて、すべて食べられないし、輸出もできない。アイデンティティと結びついた基幹産業が崩壊するという危機に見舞われました。だから彼らはこの餌の地衣類をよそから輸入して、トナカイを飼うことを続けるという苦しいことをさせられたわけですが、1200キロって、けっこう遠いですよ。

そして日本の活断層の分布。世界の地震の震央の分布を示したものですが、日本列島に住むものとしてはゾッとする図です。ですから東アジアの皆さん、私たちは共通の未来を持っている者です。それぞれできることを、特に政府に対して呼びかけて、実現していくという

ことがないといけないんじゃないでしょうか、っていうことを指摘しておきます。で、民衆としての動きにも参加します。No Nukes Asia Forum は、私も会員ですけど、非暴力で意見を申し述べていきます。

安心米の冒険、それから上関原発をはじめとする原子力村との対峙。私も最近 12 年間は学会の意見書の世話人として、できるだけ中立を守る発言をしてきましたが、学会の中には電力会社のお金をもらって暮らしているコンサルタントの人たちもたくさんいるわけですから。ですから、私たちの到達した到達点は、もっと調査しましょう。もっとよく調べましょう。これは良かったですね。コンサルタントの人も、おお、これはいい。仕事が増える。そのようにして、中立の立場で 12 年間やってきましたが、もはや、そういう形を装わなくても、本音でどんな話もできるし、そのようでない山口県を作ろうということで、飯田哲也という候補者が県知事選挙にかつがれて出てきました。

この人をひと夏の青春と言えるほど、非常に熱心に家族ぐるみで応援をしました。残念ながら 18 万票対 26 万票で負けましたけれども、頑張っていた若者たちが泣いていたのは 30 分ぐらいで、すぐ元気を出して、「またやるぞ！」って言って飯田さんを胴上げしました。今、毎月 1 回のペースで、持ち回りで各地で、自然エネルギーの勉強とか、これまでのようでない地方自治のあり方。それから夜は音楽聞いて、酒飲んで。いいお酒といい音楽と自然エネルギーを中心にすえた、コミュニティの活性化のお話をしようという会を、飯田さんを招いてやっています。

そんなふうに、選挙にも深入りしていますけれども、これは幸い、うちの大学は県立大学から、法人化して、そのときに、公務員型じゃないのを選びましたので、教職員は選挙運動をしてもいいんです。もちろん授業で「誰それに入れなかったら、単位ないぞ」ってなことを言うと、それは教育基本法などの別の法律に触れるわけですが。

うちの学校のボスがなげいていたそうです。僕は直接言わないことには返事しないんですけど、最近まとめた教科書の最後に、「私も上関ではずいぶんいろいろ頑張ってきた」みたいに、締めくくりには書こうとしたら、大学のお金で作っている教科書ですから、学部長が「それ、ちょっと変えてくださらない？ 注に落とすとか、もうちょっと目立たんようにしてくれませんか」って言うから、「はあ、なんで」と聞いたら、ボスが「いやあ、安溪君もいろいろ活発にやっとなんかいいんだが、あれさえ言い出さんければ……」って言ってたからと言うんですよ。

あれっていうのは上関原発のことです。県が一所懸命進めているものに、もの申し続けちゃってる教員が県立大にいて、県の委員とかをさせられないし、いろいろ具合が悪い。新キャンパス移転などに悪影響でもあったら、どうしようという、そういうふうな心配でもあるのでしょうか。それがまた、私がこの夏、飯田さんを応援することの予言になっていたのがおかしい。「あれさえイイダサンければ」。ダジャレで終わります(笑)。

M どうもありがとうございました。後ほど安溪先生とはディスカッションする時間が設けられておりますので、ここで何か内容に関する事実確認等がございましたら、今この時間を使って、安溪先生にお尋ねください。どうでしょう。

I 今の最後の選挙の話。本当に法人化したから良かったんですね。私も実はこの前、新潟のある国会議員の後援会で頼まれて、フィールドの人だったんで、応援しようと思ってたんですけど。そのとき、やっぱり大学に。とりあえず、どういうしほりがあるのかというものを問い合わせたときに、向こうは直接大学がそれを止めることはできないっていう、公職選挙法と教育基本法を送りつけて。そのときは確かに授業で、要するに学校の場合において、選挙運動をすることは、支援することは駄目だけれど、それ以外のところはないんだけどもという言いぶりでありつつも、制限するとなって。私。安溪さんは県立大学で県知事選やって、本当に言われなかったの？

安溪 僕は大学が法人化したとき、すぐ事務局長に聞いたんですよ。「隣の県の廿日市市の市会議員に僕の知り合いの娘さんが出て、自然保護で頑張ると言っているんで、応援演説に行きたい。もちろん年休取るか、土日かなんで、職務には影響がないものですけど」と言ったら、「どうぞ、ご自由に行ってください」と言われました。「うちは公務員型の法人ではございませんので」と聞いております。

I 準公務員扱い、みなし公務員扱いにはなるんですか。

安溪 給料的には県職員なみということはありません。

I 給料的なものですか。

安溪 例えば県職員が5%給料下げられたから、おまえらも一緒につきあって下げろみたいな。県から財政的な補助を受けているから、おまえらだけ、だだ漏れに使うのはいかんだろうと。移行措置で、同僚には県からの派遣の人もあります。県に帰っていく人。そういう人は公務員です。この夏、そういう人から、「フェイスブックのお友達申請」がきたから、「ただいま、『ひと夏の青春』で燃えているので、済んでからにしてください」(笑)。

I じゃあ、できるんですね。問題あったときは、ちょっと。

安溪 そうか。国立大学。



I 同じなんですよ。だから法人ですから、公共部門じゃないんですけど。

安溪 でも法人も、公務員型と非公務員型があって、うちは非公務員型であるということで、そこは違いがあるかもしれない。

Aー 1つ事実確認なんですけど、西表のヤマネコ米なんですけど、「自然米を売る方法があるぞ」と言ったけれど、最初は島の人言うことを聞いてくれなくて、でも翌年戻ったら、もうできて、びっくりされた。そのあと泥船の方が来られて。

安溪 その泥船の人に勧められて。

Aー 勧められて、もうできて。

安溪 始まっちゃってて、その人のおかげで。

Aー その人の尻ぬぐいを、なぜ先生が一生懸命飛び回られたんでしょうか。

安溪 島の方は、「このアンケートは」って言っていたんですよ。おまえが火付け人だろうと。

Aー その責任感で飛び回られたんですか。

安溪 その責任感じゃない。当然、行ったら、すぐに電話番しなくちゃいけないし、集荷の現場に立つ。もうそういうずぶずぶの仲間なんです。1974年から通っていて14年目でしょ。いつも行く家主のところに行けば、その仕事を手伝うのは当然だし、一緒に飲むのも当然なんですけど、それがどえらい商売を始めてしまった張本人になっていたわけです。

そして、そのあと、すごく大変だったとき、僕はバイクにガソリンを入れたら、スタンドのおやじさんがお金を取らないんですよ。「いくらですか」と言ったら、「いや、こんなに島のためにがんばっているあんたらからお金をもらうわけにはいかん」と言われて、しばらくは、ただでした。

それから民宿のおかみさんと会って話をしたら、「あんたもなんのために西表で勉強してるかどずっと思っていたけど、本当は島のためにやっていたんだねえ」と言われて、「はあ、そうなんだっけ」。なんか恥ずかしい。なりゆきでそうなっただけなのに、っていう、そういうところがありました。

Aー 分かりました。それは逃げられませんね。

安溪 逃げられないです。でも、あんまり胃が痛いので、青ざめた人たちへの対応は妻に任せて「宮古島にちょっと調査に行ってきます」と言って、僕は宮古島に1週間行ったんですよ。そのとき、「逃げるのか!?!」って言われました。「いや必ず帰ってきます」と約束してリハビリに行っていました。

Aー 倉庫を建てる前に、先生に相談はなかったんですか。島の人たちから。

安溪 ありません。

Aー それなのに。それはすごいお話ですね。

安溪 いやそれは「倉庫建てるから 100 万円送れ」とか言ってこなかっただけ、良かったんですよ。

Aー そこで断ってれば、流れが違ってたかもしれませんよ。

安溪 そうしたら、島になかなか行けない人になってしまいます。

Aー そこはきょうのテーマと関係が深いような気がしました。

安溪 ありがとうございます。

M ほかにございませんか。では安溪先生、どうもありがとうございました。また後ほど、よろしく願いいたします。